

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

自分らしさをのびのびと表現できる社会の実現を目指して：

性的少数者に関する保護者世代の啓発活動の必要性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2025-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 映子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000334

自分らしさをのびのびと表現できる 社会の実現を目指して —性的少数者に関する保護者世代の啓発活動の 必要性について—

外国語学部 教授 熊谷 映子

はじめに

性的少数者 (LGBTQ+) に関しては、スマートフォンの普及による情報へのアクセスのしやすさと情報量の増加にともない、若い世代を中心に理解が深まっている。また若い世代はこれからの自身の生き方のヒントを得ようと、他者が自己をどう表現し、どのように生きようとしているかに関心を持ち、多様な生き方を認め受け入れている。

その一方で、保護者世代は性的少数者について教育を受ける機会がなかったこともあり、子の世代ほど関心が高いとは言えず、当事者意識は低い。本エッセイでは、保護者世代を対象とした性的少数者に関する啓発活動の必要性和、当事者意識を持って性的少数者を受容することの重要性について考える。

当事者の親の心の葛藤

筆者は数ヵ月前、「自分の娘から同性愛者であることを打ち明けられた」という話を友人から聞かされた。その友人は、「性的少数者に対し差別や偏見はなく、自身は応援する立場であったが、自分の娘が当事者であると聞かされてとても混乱している、夫も差別意識は全くないが、いざ自分の娘が当事者だと知ったら、自分と同じように悲しむのではないか。そうだとしたら夫にはこの事実を伝えられない」というのである。

泣いて話す友人に向かって、「お嬢さんにはどうなってほしいの?」と尋ねると「娘には幸せになってほしい」とのことであった。聞けば、

娘はすでにパートナーと暮らしているという。続けて友人は「娘がこうなったのは生んだ私のせいなのか」、「孫はもう諦めた」というようなことを混乱した様子で語ってくれた。この時は時間がないこともあり詳しく話を聞くことはできなかったが、ここまでの会話から、頭では「差別はしない。性的少数者を応援している。」と思っていても、自分ごととなると素直に応援できないという心の葛藤があることがよく理解できた。このような葛藤は友人に限ったことではなく、大半の保護者について言えることなのではないかと考えた。

筆者の友人の葛藤、親が悲しむ理由

「泣く」という行為は本人の心がそのまま表現されているものであり、友人は娘が同性愛者であることが悲しいと感じているということである。頭では「応援している」と思いながら、心では応援できずに悲しんでいるのである。その悲しみや、泣くという行動につながった感情を、本人が発した言葉とともに具体的に考えてみた。

- ① いつかは孫を持ちたいと思っていた自分の望みが叶えられない
- ② 同性愛者では娘は幸せになれない
- ③ 娘が性的少数者なのは、生んだ自分のせいかもしれない。だとしたら娘に申し訳ない
- ④ 差別意識がないと思っていたにもかかわらず、自分ごととなると受け入れられない自分が存在することを知ったことによる混乱
- ⑤ 夫が自分と同じように悲しい思いをするのではないかとの不安

①については、いつかは孫の顔が見たい、当然見られると思っていた将来像が叶えられないという衝撃に加え、自分が体験した「家庭を築く」という幸せを味わうことができない娘を憐れむ気持ちであると考えられる。しかし、同性愛者でなくても子を持たないケース、家庭を築かないケー

スがあることから、この悲しみは同性愛とは関係ない。

②については、娘の幸せ、不幸せが何であるかを考える必要がある。娘には現在パートナーがおり、孤独という不幸は存在していないことから、現時点において娘は幸せであると考えてよい。①で述べたように、家庭を持たない、子を持たないという不幸は同性愛とは関係ない。したがってここで意味する不幸は、パートナー（恋人）が得られない不幸ではなく、同性愛者であることで社会に受け入れられない、差別や偏見にさらされることであると考ええる。

③については、2019年の研究によれば、遺伝子の分析から人の性的指向を予測するのは不可能と発表されている⁽¹⁾。したがって、子の性的指向に遺伝的要素は含まれない。

④については、自身の中に「頭での理解＝性的少数者の応援」と「素直に応援できない心」が混在することで、予想していなかった事実を受け止められずに生じた悲しみの感情であると考ええる。

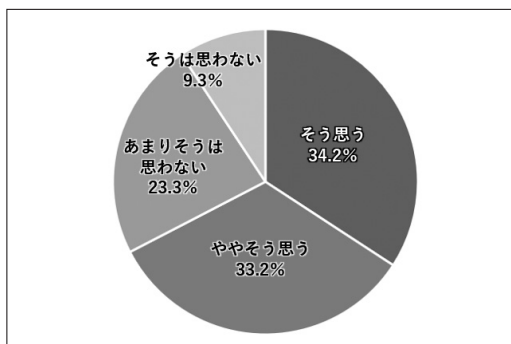
⑤について、夫も友人同様、頭での理解と心に乖離があり衝撃を受けること、友人同様に同性愛者を受け入れられないのではないかとの恐れ、それにより、今までの家族の形が変化することを恐れる感情であると考ええる。

これらの感情から、同性愛を原因とする友人の悲しみは、②④⑤にあると考ええる。ひとつは、同性愛が社会に受け入れられておらず、そのことで娘が差別を受ける恐れがあること、次に、差別はしないと思っている人でも心から受け入れてくれるとは限らないことである。いずれにしても、悲しみの源は、性的少数者であることで社会に受け入れられないことへの恐怖、不安であると考ええる。性的少数者についての理解が進みつつあるとはいえ、無条件に受け入れられる社会には程遠い現実が、当事者を取り巻く人々の悲しみにつながっているということである。

親の心

図1は、電通グループが実施した「LGBTQ+調査2023」⁽²⁾において、性的少数者の子を持つ親を対象に実施したアンケートの結果を示したものである。「性的マイノリティとしての困難があるかもしれないが、子どもの人生を精一杯応援してあげたいと思う」との問いに対し、「子どもの人生を精一杯応援してあげたい」と回答した親は約7割であった。残りの3割は「困難がない」との思いがあつての「そうは思わない」と回答したケースもないとはいえないが、素直に応援できないという親の感情が存在することが想像できる。

図1 性的マイノリティとしての困難があるかもしれないが子どもの人生を精一杯応援してあげたいと思う



出所：「LGBTQ+調査2023」のデータをもとに筆者作成

保護者世代への教育を望む声

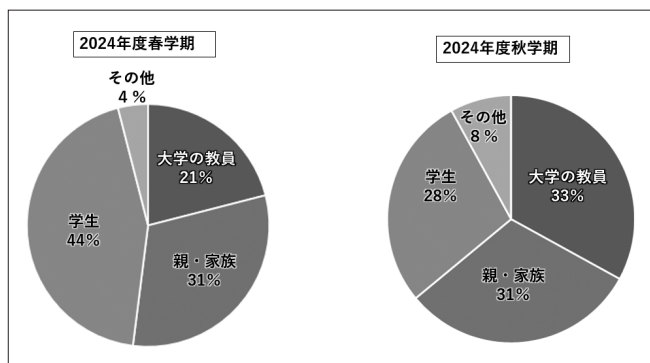
筆者は関西外国語大学に入職して以来8年間、履修学生を対象に性的少数者についての任意のアンケートを実施している⁽³⁾。アンケートには、「性的少数者について最も教育が必要なのは誰か」との問いがあるが、2024年度の結果を例に挙げれば、親や家族に対する教育がもっとも必要であるとする学生が三分の一存在している。大学の教員と合わせると、親世代への教育が最も必要だと考える学生は半数以上を示している（図

自分らしさをのびのびと表現できる社会の実現を目指して一性的少数者に関する保護者世代の啓発活動の必要性について一

2 参照)⁽⁴⁾。身近な学生に理解を求めるよりも、大人世代への教育を求めていることがわかる。

アンケートが示すように、保護者や教員といった親世代への教育を求める声がありながら、現実には親世代を対象とした教育の機会はないに等しい。心から応援する以前に、頭で理解する機会がないのである。

図2 セクシュアリティに関し最も教育が必要なのは誰だと思いますか



出所：筆者実施のアンケート結果をもとに筆者作成

認識と行動のギャップ

性的少数者の家族や身近な友人のみが認め祝福すれば当事者の幸福が実現するわけではなく、どのコミュニティに属しても、誰もが自身のセクシュアリティをのびのびと表現できる社会が実現されなければ当事者の幸福は実現しない。差別や偏見はあってはならない、性的少数者に関して理解すべき、と頭で理解していても、実際に行動につなげているケースはまだまだ少ない。

前出の「LGBTQ+調査2023」において、「LGBTQ+へのインクルージョン意識は約8割と高いものの、ジェンダー中立的な言葉を使う人は2割未満」という結果が出ており、意識と行動にはギャップがあることが示された。これは、意識はあっても具体的な行動には結びついていないと

いうことである。このように電通グループの調査結果からも、頭で理解していても行動の変容に至るまでの理解、心から沸き起こる行動にはつながっていないことがわかる。

身近に存在しないのではなく見えていない性的少数者

よく、「性的少数者が身近に存在しないのでわからない」との声を聞く。「LGBTQ+調査2023」では、性的少数者の割合は9.7%との結果が示された。これは約10人に一人が当事者であるということであり、左利きの10～12%⁽⁵⁾、血液型AB型の10%⁽⁶⁾ とほぼ同じ割合である。したがって、私たちは身の回りの左利き、AB型と同じ割合で性的少数者と接しているのである。性的少数者が身近にいないのではなく、見えていないのである。

カミングアウトについての同調査では、50.8%の当事者が「誰にもカミングアウトしていない」と回答している。「カミングアウトしている人であっても、世間全体に公表している人はごく少数で、一部の人にだけカミングアウトしている状況が多い」という同調査の分析から見ても、存在はしているが見えていないだけであり、当事者であることを打ち明けられていないだけだということを理解する必要がある。

当事者の心

筆者の過去の研究⁽⁷⁾において、FtMの性別違和者⁽⁸⁾が複数名存在する企業の事業所長にインタビューを実施したことがある。昼食を食べながらの何気ない会話の中にセクシュアリティに関する話題が上ることがよくあるという。「自身のセクシュアリティについて、職場の仲間には言っても親には言えない」というのが、当事者の中で大きな悩みであることが語られるとのことであった。実家に帰るたびに「いつまでも男みたいな恰好をして」「いい加減に女性らしくしろ」「まだ結婚しないのか」などの言葉を親から聞かされることが苦痛であるという。「親に話した

としても自分の親が理解できるとは思えない」「自身のセクシュアリティは病気でもないし、親のせいでもない、自分は幸せだから悲しんだり驚いたりしないで欲しい」「このまま一生隠していくしかないのか」「なぜ性的少数者である者だけがこんな思いをしなければならないのか」など、実家で心理的安全性を確保できない辛い思いが語られるという。親が理解しないことが子の大きな苦しみとなっているのである。

頭で理解するだけでなく心で理解

前述のFtMの社員が複数名存在する企業の事業所長は、かつては、「男は男らしく、女性は女性らしく」というステレオタイプの人間であったという。しかし、今まで自身が疑うことのなかったステレオタイプの価値観は現実とはかけ離れたものであり、間違った認識であったと思うようになった、考え方が180度変わったというのである。自分がここまで変わったのは、日々FtMの当事者と時間を過ごすなかで、セクシュアリティは多様であるということ、実体験をもって理解できたこと、それぞれが自分らしさをのびのびと表現できることが当たり前の社会でなければならないことに気付いたからであり、「頭で理解するのではなく、心で理解することができたから」とインタビューで語ってくれた。この事業所では、まずは皆が頭で理解するために、FtM当事者が講師となって教育や啓発活動を展開するなどDEI⁽⁹⁾活動を推進している。このような啓発活動で当事者の活躍する場が存在することは、当事者の存在意義や自己肯定感の向上にもつながっている。

この事業所長のように、だれもが心で理解することができれば、マイノリティといわれる少数者が差別や偏見の目で見られることなく、また当事者や家族も、だれもが互いに存在を尊重し、自分らしさをのびのびと表現できる社会の実現につながると考える。

保護者間のコミュニケーション

筆者の友人の苦しみの一つに、夫に話せないことが挙げられている。ここでは保護者間のコミュニケーションについて考える。

筆者は2024年12月7日に劇場で公開された映画「どうすればよかったか」を観た。統合失調症の症状が現れた姉と、彼女を精神科の受診から遠ざけた両親の姿を20年にわたって記録したドキュメンタリー映画である⁽¹⁰⁾。この映画では、父親は「娘が統合失調症であることを母親が認めない」と思い、母親は「娘を精神科に連れていくことを父親が望まない」と述べる。これはそれぞれの思い込みであり、その根底には「娘は統合失調症ではないと信じたい」との思いが見える。お互いにどう思っているか、この先どうするのが良いのかとの具体的なコミュニケーションはなく、そこに自分の意思、娘の意思は存在しない。「相手はこうしたいと思っているだろう」という想像だけが尊重されていたのである。映画の題名「どうすればよかったか」のとおり正解を見出すことは難しいが、「相手はこう思っているはず」との思い込みが判断を鈍らせ、行動を起こさせないまま、結果として20年もの時間が経過してしまったのである。筆者がこの映画から学んだことは、「相手の気持ちを慮ることが良い結果にはつながるとは限らない」ということである。「相手が悲しむかも」との思いや、家族の空気感が変わることに対する恐れがあっても、当事者がどうしたいのかを知ること、そのうえで周囲の家族の思いや気持ちを整理し、それぞれの希望の実現に向けて何ができるかをコミュニケーションによって明らかにし、それぞれが自分の心に忠実に自分らしさを表現することができる新たな日常を創り上げていくことが、心理的安全性を得ることにつながると考える。

それぞれが独立した別人格としての個人

筆者は子を持たないが、親には「自分の子どもにはこうなってほしい」という漠然とした思いがあることは理解できる。子には子の人生がある

ことを理解しながらも、自分の思う道に進んでほしいと思ってしまうのが親というものであると思うが、子はあくまでも自分とは別人格であり、それぞれの人生があることを、頭で理解するだけでなく、これについても心から理解しなければならない。子の幸せを望むのであれば、親の思う人生ではなく、子の望む人生を応援しなければならない。

筆者の過去の研究⁽⁷⁾のインタビューで、「自身の子が同性愛者だったら？」との問いに対し、「子どもにはプロ野球選手になってほしかったが、別の道に進んでしまったのとおなじ」と答えてくださった方がいた。性的少数者のとらえ方については社会もまだ成熟しておらず、誰もがそのようにとらえられるとは思わないが、少なくとも、自身の思いどおりに進まなかった子を残念がったり、悲しんだりすることで子を苦しめることがあってはならない。

おわりに

性的少数者に関する教育を十分受けることのなかった保護者世代が現代において直面する問題に対して、どのように現実を理解すべきかについて述べてきた。あらゆるマイノリティと呼ばれる人々を生き辛くしている社会を作り上げてしまっているのは、筆者を含めマジョリティといわれる人々であるということに気づかなければならない。そのような保護者世代にとって必要となるのは、心で理解することができるような汎用性のある仕組み作りであると考える。今後の研究課題としてその具体的な仕組みを明らかにしていきたい。

なお、最後にゲシュタルト療法⁽¹¹⁾の創始者、フレデリック・パールズの詩「ゲシュタルトの祈り」を紹介するとともに、本研究に様々な形で協力下さった方々への感謝をここに申し上げる。

「ゲシュタルトの祈り」 岡田法悦 訳

私は私のことをする、あなたはあなたのことをする
私はあなたの期待に沿うためにこの世にいるのではない
あなたは私の期待に沿うためにこの世にいるのではない
あなたはあなた、私は私
それでもしお互いが出会うなら、すばらしい
もし出会えないなら、しかたない

注

- (1) 大規模ゲノムワイド関連解析 (GWAS=genome-wide association study, GWA study) によって明らかにされた。参考論文参照。
- (2) 電通グループが2012年から実施している、LGBTQ+をめぐる現状の把握・課題発見を目的とした調査。「LGBTQ+調査2023」は第5回調査。参考URL参照。
- (3) 筆者が2017年度秋学期から2024年度秋学期までに実施した多様性に関するアンケート。講義受講前と講義受講後で認識に変化が生じたかなどを含め、性的少数者に関する質問を含む。アンケートは任意で、回答は論文等で使用することがある旨了承を得たうえで実施してもらっている。
- (4) 大学の教員に「最も教育が必要」と考える学生が、2024年度春学期に比べ2024年度秋学期に12ポイントも増加した理由として、「関西外大の教員から性的少数者に対する差別的な発言を聞いたことがある」と回答した学生が存在することを受けての結果であると考えられる。
- (5) 高橋（2010）によれば、日本における右利きの割合は88～90%、左利きの割合は10～12%。高橋正憲著（2010）「利き手に関する一考察」『総合リハビリテーション 38巻8号』795頁
- (6) 仙台市立病院臨床検査科豆知識「第5回 血液型のはなし－ABO式血液型－」によれば、A型約40%、O型約30%、B型約20%、AB型約10%。参考URL参照。
- (7) 筆者の大学院ビジネス研究科における研究。参考論文参照。
- (8) FtM (Female to Male) は、身体は女性で心は男性である性別違和者を指す。性別違和者とは心の性と体の性に違和を感じるセクシュアリティを指す。GID

自分らしさをのびのびと表現できる社会の実現を目指して一性的少数者に関する保護者世代の啓発活動の必要性について―

(Gender Identity Disorder) ともいう。心の性と体の性が一致しないセクシュアリティを、世界的にもトランスジェンダーと呼ぶことが多いが、「トランス」には「越境」という意味があり、性別を男女の二元でとらえ、その境界を越えるとの意味がある。セクシュアリティは男女のみでとらえるものではなく、人の数だけ存在し境界は存在しないため、「トランスジェンダー」という表現は適切ではないとの考えがある。

- (9) DEIはDiversity (ダイバーシティ)、Equity (エクイティ)、Inclusion (インクルージョン) の頭文字をとった言葉。
- (10) ドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」。ドキュメンタリー監督の藤野 知明が、統合失調症の症状が現れた姉と、彼女を精神科の受診から遠ざけた両親の姿を20年にわたって自ら記録したドキュメンタリー。劇場公開日2024年12月7日、2024年12月26日視聴。
- (11) 田房永子 (2016) 『キレル私をやめたい』 竹書房、132頁。原文であるドイツ語の詩の日本語訳はいくつかあり、最後の一節は「出逢えないことも素晴らしい、それをそのまま受け入れる」との意味で解釈されることが多い。ゲシュタルト療法 (ゲシュタルトセラピー) は精神科医、フレデリック・S・パールズと妻のローラ・パールズにより、ゲシュタルト心理学、実存主義思想などを手がかりにはじめられたもの。ゲシュタルトはドイツ語で「かたち」を意味し、「今・ここ」で、「なにを」話しているかに注目することで自分自身であるという自由を取り戻すことを目的とするもの。

参考文献

フレデリック・S・パールズ (1990) 倉戸 ヨシヤ・日高 正宏・井上 文彦・倉戸 由紀子 (翻訳) 『ゲシュタルト療法: その理論と実際』 ナカニシヤ出版

参考論文

熊谷 映子 (2021) 『大学における性の多様性と包摂の実現に向けて ―LGBTQ+の受容をめぐる検討―』 同志社大学大学院ビジネス研究科ビジネス専攻2020年度ソリューションレポート (修士論文相当)

高橋 正憲 (2010) 「利き手に関する一考察」『医学書院総合リハビリテーション』 38巻8号、795 - 800頁

自分らしさをのびのびと表現できる社会の実現を目指して 一性的少数者に関する保護者世代の啓発活動の必要性について—

Andrea Ganna,Karin J.H.Verweij,Michel G.Nivard,Robert Maier, Robbee Wedow, Alexander S.Busch,Abdel Abdellaoui,Shengru Guo, J.Fah Sathirapongsasuti,Sebastian Lundström,Niklas Långström, Adam Auton,Kathleen Mullan Harris,Gary W.Beecham,Eden R. Martin,Alan R.Sanders,John R. B. Perry,Benjamin M.Neale,Brendan P.Zietsch (2019) 「Large-scale GWAS reveals insights into the genetic architecture of same-sex sexual behavior」『Science』 30 Aug 2019 Vol 365, Issue 6456, DOI: 10.1126/science.aat7693

参考URL

仙台市立病院Webサイト「臨床検査科－豆知識 第5回 血液型のはなし－ABO式血液型－」

<https://hospital.city.sendai.jp/department/mame05.html>

閲覧日時2024年12月30日

電通ダイバーシティラボ「LGBTQ+調査2023」

<https://www.group.dentsu.com/jp/news/release/001046.html>

閲覧日時2024年12月30日

Large-scale GWAS reveals insights into the genetic architecture of same-sex sexual behavior

<https://www.science.org/doi/10.1126/science.aat7693>

閲覧日時2024年12月24日